

病弊の原因を探る

「日本の教育の病弊は敗戦後に始まった」というのが一般である。「親がその体験を子どもに残す」ことが教育であり、人類発展の原動力であるのに、敗戦後の日本の教育者たちは、自分の体験をすべて悪いものとしたばかりか、今まで伝え伝えて来た先人の知恵まで誤まっていたものとして、次の世代に伝えることをせず、生かじりの欧米流の教育を施して来た。歴史の異なる社会に育って来た考えがわが国にうまく合うはずがなく、そこに病弊が起こるのは当然である。

ところが、「病弊はすでに明治時代、義務教育が実施された時に始まった」という意見がある。

すでにくり返して述べているように、教育は、親のわが子に対する本能的、必然的な行為であるから、法律的な権利義務によって拘束すべき性質のものではない。そういう、道徳以前のものである教育を、「義務教育」などと改まった名前を付けることにより、道徳以下のものである法律によって拘束することにしたのであるから、これは確かに“墮落”と言えは言えないことはないであろう。

しかし、それだけのことならまだよい。ところが、義務教育の施行を境にして、それまで「親が行なう」ものであった教育が、「政府とは学校が行なうもの」という考えに変えられ、それも日本の社会を全面的に支配してしまった、というところに問題がある。

その昔、貴族たちは、学者をわが家に招いてわが子の教育に当たらせた。学問は学者に任せた方が確かだからである。しかし、学問が教育のすべてではないし、第一、任せっぱなしでは、親としての責任が取れない。

だから、昔の親は、学問においては学者に任せたが、わが子の教育のすべてを決して学者に任せっぱなしにはしなかった。以後の責任は親が取って、決して手離さなかったのである。

この、「学問は学者に任せる」形が、一家のものから、一族のものへと拡大したものが氏族学校であり、学校の始まりである。だから、学校とは、「親が行なうべき教育を、その道の権威が親に代ってその一部を分担するもの」という考えが礎としてあったのである。